

保育者及び小学校教員養成課程在籍者の 観察力の向上に関する考察

— りんご「ふじ」の描画における発見の言語化の効果 (1) —

The Practice on method of improvement observation skills of preschool teacher training and primaryschool teacher training students

— Linguistic Effect of Discovery in Drawing of Apple Fuji (1) —

中 尾 泰 斗
Taito Nakao

1. はじめに

保育者養成及び教員養成課程在籍者（以下、学生と記す）は、作家として自立するための専門性を学ぶ美術大学生とは制作活動の目的を異とする。

それを一つの要因として、各養成機関における開講科目の受講者の中に造形や絵画制作を消極的に捉える学生が一定数存在するという点は、先学の指摘を振り返っても枚挙に暇がない。

その理由の代表例に「うまく描けない」というものがある。しかしそういった中でも、学生に制作力を向上させたいという意向があることもまた事実である。このような点から、学生自身の造形力や描画力の向上に向けた対策は、多様な方法の提示が望まれる。

1-1. 対象者の描画の段階

学生が示す「うまく」という言葉は、発話者ごとの理想像を示すための抽象的、便宜的な表現であると言わざるを得ない。そこでまず、その言葉の捉え方を、対象者の描画の発達段階から考えたい。

本稿の対象である保育者と小学校教諭を目指す学生は概ね 18 歳から 20 歳前後の青年である。その描画の発達は、「図式期」から展開した「写実期」（8 歳以降）を経た「完成期」（14 歳～18 歳ごろ）に属し、その特徴は、対象が何であるかを示す知的リアリズムから、物を見たとおりに描く視覚的リアリズムへと反応を

変化させた段階にある¹。

しかしこの展開は、その移行期においてどちらの特徴か定かではない時期が発生する。それによりこの時期は、創作の方法を見失った制作者が自信を喪失させる危機が多く生じる。そしてこの移行は困難を伴う推移であり、そのためにそれ以前と比較してより意識的に視覚的観察に依る再現への適応力が必要となるという一連が V・Lowenfeld (1963²) によって示されている。

そして進藤 (2013³) は段階の移行において障害となっている条件が、出題された課題の文脈や意図の理解、運筆能力の不足にあるとし、そのことで、年齢的に写実期の段階にあっても、結果的に制作の成果物の表現に「対象の典型概念を積極的に持ち出すことによって描く⁴」図式期の様相を招くことを示唆している。それを示すように本実践においても殆どの学生は、りんごを描画する際にその色彩に赤色を主とし、形を記号化したものとなる傾向がある。つまり、これらからは養成課程に在籍する学生の描画力が完成期への移行を完了していないことが伺える。

このような点を踏まえると、年齢的に完成期に位置する学生は、描画の理想像が視覚的リアリズムにありながらも、自身の描画力不足によって図式期的な表現を表出せざるを得ない傾向があると捉えられる。このことから、学生の示す「うまく描けない」という意識は、発達段階における移行の未完了に端を発した自信の不足から発生していると理解される。

そしてそれらを鑑みると、学生の描画活動では「写真のような絵」に代表される客観性が顕在化した作品を理想とする概念とともに、実際の制作では学生が位置する描画力の段階が図式期であるために自身の理解しやすい単純化した表現を表出する。またそれが周囲の同じ段階の学生に受容される傾向があるとわかる。

1-2. 観察力の重要性

上述のような傾向が見られながらも学生には、卒業後に保育士や教員として現場で耐えうる描画能力が要求される。この点は丹（2008）が示すように、在学中の学習のみでは極めて厳しいながらも、学生にとって必須の条件の一つである⁵。

それは中崎（1971）が指摘するように実践を通じた「描く行為における造形性の基本的な体験とするどい目を養う⁶」という二項を習得することで達成されるといえよう。つまり、描画の能力の獲得には技術の向上とともに観察眼の修養が求められるのである。

その必要性は斎藤（2007）らが、デッサンの学習支援環境に関する研究の中で芸術活動の流れを①外界の知覚・認識、②認識と行動の対応づけ（認識の結果に対する最適な行動の選択）、③行動を繰り返すことで達成されると順序立てている⁷ように芸術活動の学習法からも示されている。

つまり、中崎の述べた描画力向上のための目を養う重要性を踏まえると、技術の観点に位置する②と③を下支えする①の点を学生が認識し修練することは、制作や表現の根本を認識する重要な学びであると捉えられる。

そして図画工作や造形では、教育活動を通して幼児や児童の知覚と認識力を育む必要があることは論を俟たない。それは、幼稚園教育要領における表現のねらいに「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。⁸」と記され、その後に接続する図画工作の小学校学習指導要領にて感じたことから制作へと展開する流れが一貫して重視されていることから理解される。

その中で保育領域では、子どもの感動や体験の共有のために、保育者に子どもの造形活動や園生活での気づき発見を共感できる能力が求められる⁹。

1-3. 本稿の目的

以上のような点からその重要性が見出せる養成課程在籍者の描画力の向上を目的とした観察能力の習得は、今日までその学習法が示されることが少ない。関連する先行研究では、古賀（2014¹⁰）による形態の描写という観点からの描画力の向上を目的とした実践がある。しかしその研究は、技術的な側面に重点を置いており、感じる、発見するといった観察の効果を具体的に示すことが主たる目的ではない。

斎藤が示しているような制作活動における「外界の知覚・認識」すなわち観察行為の方法は、中崎によれば「眺めるのではなく撫でまわすが如くに見る¹¹」ことが求められるとされている。つまりその習得には、視覚や嗅覚、触覚を通して、対象を体感するという手続が必要とされる。

そこで本稿は、養成課程在籍者の学生に向けた観察法の検討のために、観察を経て発見したことや色数、表現、形態の気づきをまとめ、その成果がもたらす描画や表現の変化を明らかにする。

2. 研究の方法

本稿では、19歳から20歳の女子大学生114名を対象にりんご「ふじ」の絵画制作を行う。

学生は、観察での発見や効果を明瞭なたちで確認するために、作業の工程毎での考えや発見を言語化する。そして、制作後に新旧の描画を見比べ、その変化を振り返る。

本稿では紙面の都合上、使用した色数が3色のものに関して、その結果の報告と考察を行う。その他の色数と、総合的なまとめは別稿に譲る。

2-1. 研究の手続き

- ①りんごの品種「ふじ」を描くように出題する。
- ②学生は自由に描画する。その際に使用した色名を明記する。
- ③演習時点で学生が把握しているりんごの特徴を文字化する。
- ④実物のりんごに触れ、上面や側面等の多角的な観察により発見した事柄を自由に記述する。
- ⑤④での記述を反映した描画を行う。

⑥両者の相違点を振り返る。

3. 結果

3-1. 使用された色数と色名

実践の冒頭で出題した際、学生はそもそも「ふじ」という品種を知らないという意見が多くあった。このことから殆どの学生は、筆者の設問を下敷きにしながらも、学生個人の経験に基づく想像上の「りんご」を描いたと捉えられる。

その描画の結果、学生が用いた色は表1.に示すように4色までが多くなった。そして表2.表3.からはその色彩の選択が、りんごの固有色を示す赤が最も多く、次いで黄色と黄緑という、りんごを象徴するために欠かせない色が多く用いられた。表4.の赤色とその他の色との組み合わせを鑑みてもその傾向は顕著であるといえよう。

その他の色彩を通観すると、茶色や橙、ピンクなどの赤に近い性質を持った色の使用が目立ち、寒色の使用はごく稀であった。

これらのことから被験者は、固有色を中心に彩色を仕上げる姿勢があることがわかる。また、図1にみられるように、その描画法は赤や黄で形態の内を塗りつぶすそうとするものが多い。このような作品の傾向を鑑みると、その制作は観念的な表現に留まるものが多く、それらに学生の個々の観察に基づく主観や発見の表出は控えられているといえよう。



図1 学生が自由に描画したりんごの一例

表1. 色数の内訳

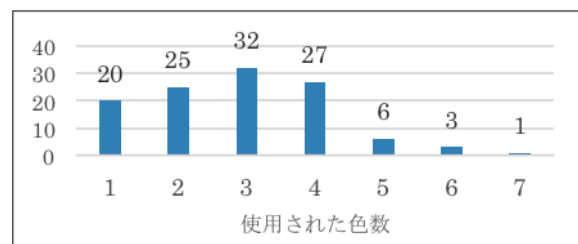


表2. 使用された色の内訳

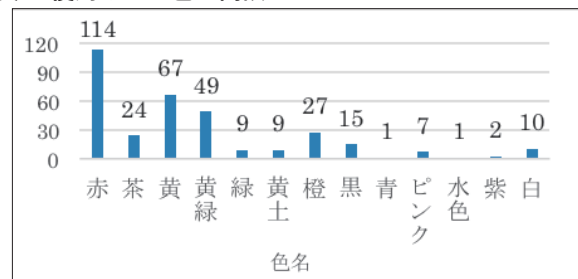


表3. 使用された箇所

赤	固有色
黄	へた、下部、表皮、ハイライト、斑点
黄緑	へた、下部、表皮、斑点
橙	下部、表皮
茶	へた、下部、表皮、暗部
黒	へた、下部、表皮、暗部、斑点
白	中間色、ハイライト、斑点
黄土	へた、下部、表皮、暗部、斑点
緑	斑点、へた、下部、表皮
ピンク	表皮
紫	表皮、影
水色	暗部
青	暗部

表4. 赤色との組み合わせ

使用された色数 1色

赤のみ
20

使用された色数 2色

	白	黄	橙	黄土	黄緑
1		13	2	1	8

使用された色数 3色

	黄、橙	黄、黄緑	黄、黒	黄、黄土	橙、黄緑	黄、茶
3		13	4	2	2	2
茶、黄緑		黄緑、黄土	茶、緑	白、橙	茶、黒	青、黄
1		1	1	1	1	1

使用された色数 4 色

黄、緑、茶	橙、黄、黄緑	黄、黄緑、黒	茶、黄緑、橙	黄緑、黄土、茶	紫、ピンク、橙
1	5	3	1	2	1
黄、黄緑、茶	黄、黄緑、白	ピンク、橙、茶	ピンク、橙、黄緑	橙、茶、黒	黄、黒、茶
2	2	1	1	2	1
黄緑、橙、黒	黄、橙、茶	黄、橙、ピンク	黄、白、黒		
1	2	1	1		

使用された色数 5 色

緑、黄緑、黄、黒	黄、橙、黄緑、茶	紫、黄、緑、黒
1	1	1
黄、茶、黄緑、ピンク	黄緑、黄、緑、茶	白、黄、黄緑、茶
1	1	1

使用された色数 6 色

黄、橙、黄緑、緑、白	橙、白、黄土、黄色、茶	黄、白、ピンク、黄土、橙
1	1	1

使用された色数 7 色

ピンク、水色、黄、橙、黄緑、茶
1

3-2. 使用した色数別にみる観察による色彩の認識

前項が前提となる被験者が実際のりんごの観察を経ることで発見した色彩を、3-1 で使用した色数の別に表5にまとめた。

表5からは、観察によって中間色や赤の多様な変化、混色された色彩が全体を通して認識されたことがわかる。そして表6から表11に示すようにその分布と内訳の詳細からは、学生が白を多く発見したことが確認される。

その中で使用数が1色であった学生は、2色から10色までの色数を発見した。表5を参照すると、10色を発見した学生はピンク等の中間色やマスカット色という自身で形容した混色の色味を見出している。また、観察によって赤茶や深い赤、薄い赤、濃い赤等の赤色の変化を感じ取っていることがわかる。

そして使用数が2色の学生は、使用数1色の場合よりも赤の変化をより多く感じているとわかる。また、青黄という記述からは、学生が言語化しづらい色調を発見しているものと推察される。

使用数が3色であった学生は、濃淡や明暗、くすみ等上記よりもより微妙な色合いを認識していた。また混色した色の色味を多く発見していることも特徴的であるといえよう。

表 5. 使用した色数別にみる観察により発見した色名

発見した色数	発見した色		
	使用した色数が1色であった学生	使用した色数が2色であった学生	使用した色数が3色であった学生
2	黄	黄緑	
3	黄、くすんだ緑	黄、黄緑	黄、黄緑
4	黄、茶、黄緑、橙、白、薄桃、	黄、黄緑、白、赤茶、	黄、茶、黄緑、白、黒、緑、薄い黄
5	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、赤茶、濃い赤、ピンク	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、深い赤、青	黄、茶、黄緑、橙、白、緑、暗めの赤、薄い黄
6	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、赤茶、濃い赤、薄い黄、黄土、白い黄、クリーム、深い赤	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、濃い赤、黄土、白い黄緑、薄い赤、暗い赤、こげ茶	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、ピンク、緑、かすんだ赤、照りのある赤、薄い黄、暗い赤、濃い赤、薄い赤、青
7	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、ピンク	黄、黄緑、橙、赤茶、濃い赤、薄い赤	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑
8			黄、茶、黄緑、橙、白、黒、ピンク、黄土、薄い黄緑、赤茶、薄い赤、濃い赤、橙と赤の混色、臍脂、濃い茶、青
9	黄、黄緑、橙、白、黒、赤茶、朱		黄、茶、黄緑、橙、白、黒、ピンク、緑、濃い赤、薄い赤、薄い黄
10	黄、黄緑、白、黒、ピンク、くすんだ黄、薄い黄、ワインレッド、マスカット色	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、ピンク、濃い赤、青黄	

(1) 使用数 1 色の学生

表 6. 発見した色数の分布

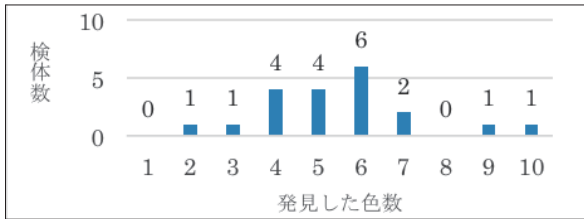


表 7. 色名とその内訳

赤	20	白	13	朱	1
茶	6	ピンク	4	赤茶	2
黄	17	薄桃	1	クリーム	1
黄緑	14	くすんだ緑	1	白い黄	1
緑	4	薄い黄	3	薄い赤	1
黄土	1	くすんだ黄	1	深い赤	1
橙	5	ワインレッド	1	濃い赤	2
黒	8	マスカット色	1		

(2) 使用数 2 色の学生

表 8. 発見した色数の分布

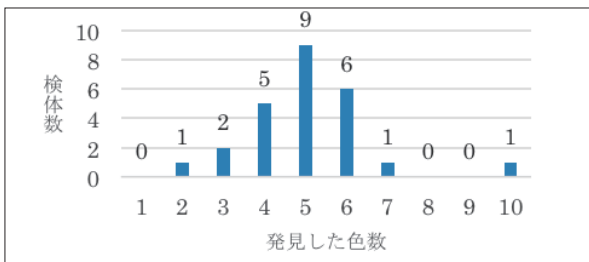


表 9. 色名とその内訳

赤	25	黒	7	こげ茶	1
茶	4	白	17	暗い赤	1
黄	21	ピンク	1	薄い赤	3
黄緑	22	青	1	深い赤	1
緑	7	赤茶	2	濃い赤	3
黄土	2	黄青	1		
橙	7	白い黄緑	1		

表 12. 被験者のりんごの形と質感に対するこれまでの認識と観察により発見した内容

	使用した色が 1 色であった学生	使用した色が 2 色であった学生	使用した色が 3 色であった学生
りんごに対するこれまでの認識	丸み 丸っぽい 台形 左右非対称	丸み 丸い 球 縦長 下に向けて細い	丸い 丸っぽい 縦長 上下にへこみ 大きさは拳くらい つるつるしている

(3) 使用数 3 色の学生

表 10. 発見した色数の分布

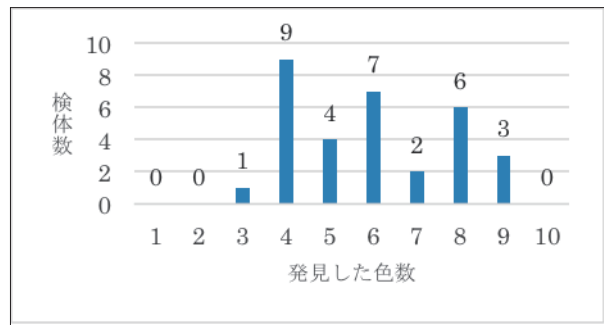


表 11. 色名とその内訳

赤	32	白	21	暗めの赤	3
茶	14	ピンク	9	赤茶	1
黄	29	青	2	照りのある赤	1
黄緑	29	濃い茶	1	薄い赤	4
緑	8	薄い黄	4	赤と橙の混色	1
黄土	1	薄い黄緑	1	濃い赤	3
橙	13	かすんだ赤	1	臙脂	1
黒	12	明るい赤	1		

3-3. かたち、質感への気づき

学生が観察によって得た色彩以外の情報は、形や質感、においに関する事項に集約された。

その特徴は表 12 に示すように、四角や三角、台形等の基本的な形を基に、角張った、不揃い等の観察対象が固有に持つ細部の特徴を確認することで、丸に近いというりんごに対するこれまでの形態の認識からの変化が見られる。そして視覚や触覚、嗅覚を通じた観察によって、光や表皮の細部の質感、香りへの気づきがあったとわかる。

		観察により発見した事項		
色数		使用した色が1色であった学生	使用した色が2色であった学生	使用した色が3色であった学生
かたち	上面からの発見	いびつな丸 長丸 三角のような丸 楕円	丸くない いびつな丸 楕円 丸に近い角がある	正円ではない 溝が意外と深い いびつな丸 横長の丸
	側面からの発見	凸凹 斜めの傾き 台形 上下が平ら 上が広く下が短い 角が丸い四角 下部がへこんでいる 左右非対称 球ではない	斜めに立っている 曲線的 角が丸い四角 平行四辺形 左右非対称 楕円 上が広く下が短い台形	台形に近いいびつな丸 丸い台形よりの四角 凸凹 縦長の丸 側面が丸い長方形 曲線の曲がり方が左右で違う 上が広く下が狭い 上がへこんでいる
質感		手前に出ている部分に照り 光って見える 影がある さらさらしてそう 傷がある 縦ご模様がある	つやがある ざらざらしている いい匂い 縦線がある	ざらざらしている 光沢がある いい匂い おいしそう 傷がある

3-4. 描画の変化に対する認識と自覚

ここまでの成果を反映させた制作にて学生が感じとった以前の描画との変化を表13.にまとめた。特に目立つものは、色彩において濃淡の差や鮮やかさ、柔らかさ等の細かな色彩の変化を表せることができた実感している点である。また、図2に示すように黄や白の使用法が線的なものとなっていることも以前からの変化といえよう。

形態においては、奥行きや影の描写によって立体感を感じるように変化した他、先の観察で発見したように形が逆三角や底辺が狭い台形に変化した。その他、光沢や汚れ等の光源や表皮の質感の追求も、観察によって反映された点となった。



図2 観察を反映して描画したりんごの一例

以上のような視覚的な変化とともに、感覚的な認識の変化も見られた。視点や描画行為の変化、実在感の獲得、自身の想像との差等が、観察を経た描画を通して実感できたことが示された。一方で、その表現に下手さやりんごとの非類似性を感じ取った意見も少数あった。

表 13. 観察により発見した形と質感

	認識した描画の変化		
	使用した色数が1色であった学生	使用した色数が2色であった学生	使用した色数が3色であった学生
色彩	<p>赤一色であったものの色数が増え、本物に近づいた</p> <p>赤が柔らかくなった</p> <p>くすんだ</p> <p>鮮やかさがなくなった</p> <p>色の濃さの差が出た</p> <p>へたの部分にも色が付いた</p> <p>下部が黄色になった</p> <p>黄緑の模様が增えた</p> <p>白い斑点が増えた</p>	<p>色が增えた</p> <p>色が薄くなった</p> <p>色が暗くなった鮮やかな色と濁った色の両方を使った</p> <p>一色の中で濃淡の変化が出た</p> <p>非対称に色を塗った</p> <p>輪郭が濃い色だったものが皮と同じくらいの濃さになった</p> <p>下手の部分が暗くなった</p> <p>黄の縦線が増えた</p> <p>白い斑点が増えた</p>	<p>色数が多くなった</p> <p>色数が増えて鮮やかになった</p> <p>色が薄くなった</p> <p>色が暗くなった</p> <p>下地が黄になった</p> <p>濃い赤が増えた</p> <p>赤の面積が減った</p> <p>二色以上が混ざるようになった</p> <p>色が柔らかくなった</p> <p>濃淡を意識した</p> <p>色の始まりと終わりを意識した</p> <p>全部赤じゃないと分かった</p> <p>グレーを使っつくすみを表した</p> <p>へたの周りが明るい色になった</p> <p>下のほうが薄い色になった</p>
かたち	<p>左右対称ではなくなった</p> <p>左右の丸みが異なるようになった</p> <p>かたちが奇麗じゃない</p> <p>奥行きが出た</p> <p>斜めに傾いた三角になった</p> <p>角を意識した</p> <p>かたちが逆台形に変わった</p> <p>かたちが縦長になった</p> <p>へたが見えなくなった</p> <p>丸ではない、傾いたかたちになった</p> <p>感じ取った縦線を描くと立体感が出た</p>	<p>下が細くなった</p> <p>縦長になった</p> <p>いびつな形を再現した</p> <p>正円ではない、角のあるような丸になった</p> <p>へたを描かなくなった</p> <p>上下が平らになった</p> <p>平面的ではなくなった</p> <p>楕円になった</p>	<p>イラストから実物に近いものになった</p> <p>立体感が出た</p> <p>斑点や筋などの細部を表現した</p> <p>影を付けて球体感を出した</p> <p>へたが無くなった</p> <p>かたちがいびつになった</p> <p>曲線的になった</p> <p>横長になった</p> <p>左右非対称になった</p> <p>上下の違いを表した</p> <p>台形になって傾きがわかりやすくなった</p> <p>台形に近い四角になった</p>
質感	<p>光沢を出そうとした</p> <p>光の当たるところが上部になった</p>	<p>傷や汚れを描いた</p>	<p>つやが出た</p> <p>傷を描いた</p>
その他	<p>本物に近くなった</p> <p>想像で描いた時と色や形が全く違った</p> <p>下手になった</p> <p>くぼみ等、色だけでは表しきれない部分が出てきた</p> <p>ベタ塗から縦に塗るようになった</p>	<p>視点が変わった</p> <p>想像よりもうまく描けない</p> <p>放射状に塗った</p> <p>タッチが変わった</p> <p>リングっぽくなくなった</p> <p>おいしそうではなくなった</p> <p>筋に合わせて縦線で塗った</p> <p>童話っぽさがなくなった</p>	<p>塗り方が強くなったところがある</p> <p>放射状の塗り方になった</p> <p>リング感が無くなった</p> <p>描く角度が変わった</p> <p>思っていた形と違った</p>

4. 考察

実践の冒頭で起こった、学生の「ふじ」の品種を知らないという設問に対する理解の不足は、その後の制作行為の選択や動機付けの妨げとなったと考えられる。ひいてはそれが「図式的なりんご」を生む結果となり、学生に知的リアリズムの傾向が表出する一因になったと捉えられる。

つまり、完成期における描画活動の充実には、制作者が日常生活の中で様々な体験や事象の認識を深め、それを明確化させることが不可分であるといえよう。

そのような現状の中、本稿では養成課程在籍者の描画力の向上のために、観察とその成果を言語化する効果について検証した。その結果、学生は言語化が困難な微妙な色合いや形態を認識するようになった。

実物のふじの色彩は赤の色味がやや抑えられ、黄やピンク等が垣間見える傾向にある。観察後の描画において、その点が反映されたものが多かった。

加えて、自身の感じたことを文字によって明確化することで、その描写は多くの場合でより多様性を持った色彩と形態が表出した。そのような違いの中に、各個人の空想ではない実体験に即した主観や個性が反映されていると捉えられる。

さらに本実践では、観察後の表現が立体感や奥行き等、本物に近い実在感を感じるものに変化することが多いという結果となった。また、自身が実感したそれ固有のりんごを描こうとする作画姿勢も生まれた。これらの点に関する全体の結果の比較とその考察については別稿に譲るが、本稿で示したものに関して「本物に近づいた」と感じている点は、本実践における発見の言語化が完成期に属する学生の描画活動の自己肯定感を満たすとともに、認識を経て最適な挙動を選択し、実際に行動するという制作の循環に即した能力の向上につながったのではないだろうか。

5. 今後の課題

今後は残りの4色以降の結果をまとめるとともに、今回比較した相違点を踏まえて、どちらが「いい絵」として制作者に受容されているのかを明らかにする。これにより学生の描画への認識の実態を明瞭にした

い。

また、本実践の対象者は女子大学生に限定されている。今後は男子大学生まで実践の範囲を広げることで、性差による観察の違いや両者の共通点について検証していきたい。

註

- 1 進藤将敏「幼児における描画発達研究の外観と展望」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第62集、2013年、218頁
- 2 V・Lowenfeld 著、竹内清、堀内敏、武井勝雄訳『美術による人間形成』黎明書房、1963年、327頁
- 3 進藤将敏「幼児における描画発達研究の外観と展望」218頁219-221頁
- 4 同上、219頁
- 5 丹進「真似るから学へ-描画能力を高める一試案-」『園田学園女子大学論文集』第42号、2008年、217頁
- 6 中崎修男「幼児美術教育の基本的問題の考察」『駒沢女子短期大学研究紀要』第5巻、1971年、86頁
- 7 斎藤洋志「デッサン学習者の視線と動作の分析と学習支援環境への応用」第21回人工知能学会全国大会、2007年、1頁
- 8 『幼稚園教育要領〈平成29年告示〉』フレーベル館、2017年、20頁
- 9 同上、162頁
- 10 古賀隆一「絵画教育研究(その3)-幼児・児童画の心と基礎デッサン入門-」『南九州大学人間発達研究』第4巻、2014年
- 11 中崎修男「幼児美術教育の基本的問題の考察」85頁

図版典拠

図 1.2 筆者撮影

表 1-13 筆者作成